

研究結果報告書

日帝強占期における日本人学者の朝鮮研究についての考察：
津田左右吉の東アジア古代史研究をめぐって

所属：忠南大学校 教育大学院
役職：招聘教授
氏名：朴 美京

本研究は日本だけでなく、韓国古代史研究にも重大な影響を及ぼしている津田左右吉(1873～1961)の韓国と日本の古代史研究における相関関係を明らかにし、その実態を総合的に調査することを目的とする。と同時に、いわば「津田史学」の実態とその研究内容は何であったのかを明らかにするものでもある。

そのため、本研究ではまず、津田の核心研究であると同時に韓国古代史とも直結する『古事記及び日本書紀の新研究』、『神代史の新しい研究』（『津田左右吉全集』別巻第1、岩波書店）を中心に考察を行った。その結果、『古事記』『日本書紀』をはじめ、日本の古代記録に対する厳しい資料批判を加え、これらの記録が虚構であることを主張したがために、結果的に皇室冒瀆罪に問われ有罪判決まで受けた津田ではあるが、津田の研究は天皇の権威を低下させるためではなく、むしろ天皇の権威を守るべき手段であったことがわかった。

津田はその師の白鳥庫吉(1865～1942)とともに代表的な単一民族論者として知られているが、そのせいか、津田は当時の朝鮮民族との同化政策についても否定的だった（『津田左右吉全集』別巻第1、497頁）。彼の一連の日本神代史や古代史の解釈方法は日本民族の朝鮮半島からの到來說を否定するためであったように考えられる。

単一民族主義者の津田は、日韓民族の系統関係について否定しているのである（『津田左右吉全集』第3巻、岩波書店、416頁、441頁、452頁など）が、その代表的な例として挙げられるのが天孫降臨神話である。従来多くの学者は、この天孫降臨神話を根拠に古代日本の支配者が日本列島の外部から来た征服者であるとの主張をしていたが、津田はこの神話を非合理的な説話であると評し、否定している（『津田左右吉全集』第28巻、岩波書店、128頁）。

また、『古事記及び日本書紀の新研究』の第一章から第3章は、それぞれ「新羅征討の物語」「クマソ征討の物語」「東国及びエミシに関する物語」であるが、ここでも、津田は『古事記』、『日本書紀』に見える異民族との接触をめぐる記録について批判している。つまり、津田は国家権力によって作られた『古事記』、『日本書紀』を架空の物語と解釈することによって日韓の民族が系統を同一にするものであることを否定するとともに、日本民族は単一民族であるという自分の主張をより一層、強固なものにするためのものであったと見受けられる。

さらに日韓関係史に関する津田の研究は『三国史記』についての批判と不信論を中心に展開しているのであるが、彼によると、『三国史記』は伝説・虚構・造作であるとする（『津田左右吉全集』別巻第1「『三国史記』の新羅本紀について」など）。また、『古事記及び日本書紀の新研究』においては他にも新羅に関わる色々な神話をも分析しているのであるが、例えば、スサノヲの新羅訪問神話、新羅の王子のアメノヒボコの渡来神話、神功皇后による新羅征伐神話などがそれである。これらの記事は古代における日朝関係を窺わせるものとして注目されてきたのであるが、津田はこれらの記事をまったくの「虚構」とし、事実として認めようとしなかった。にもかかわらず、神功皇后の新羅征伐神話については、その記事内容をそのまま信じるわけにはいかない（『津田左右吉全集』別巻第1、16頁、17頁、259頁、268頁）としながらも、一方では事実によるものであろうとし、認めるような矛盾した態度を見せてもいる（『津田左右吉全集』別巻第1、266頁、267頁、270頁）。

こうしてみると、津田の実証主義に対して疑問の念を禁じえないのも事実である。このような解釈にはやはり単一民族主義者であった津田の意図がどこにあったのかを

窺わせていると言わざるを得ない。

そして韓国古代史についての彼の解釈は植民地期における多くの日本人史学者と同様、政治的論理に影響されており、彼の研究は植民史学の域を出るようなものではなかったといえる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「日帝強占期における日本人学者の朝鮮研究についての考察- 津田左右吉の東アジア古代史研究を中心に -」・朴美京・『人文学研究』・2016年10月投稿予定。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)